

付着動物

1 調査方法

(1) 調査地点及び調査月日（図2 - - 1）

中央防波堤外側（その2）東側 9月28日

13号地船着場 9月28日

(2) 調査方法

ア 鉛直分布

岸壁上から海底まで垂直に巻き尺を張り、これに沿って付着動物の鉛直分布状況（種類、被度、分布範囲）を観察した。

イ 付着量

両調査地点の潮間帯（A.P.+1.0m）及び潮下帯（中央防波堤外側 A.P.-2.5m、13号地船着場（A.P.-2.0m）について30cm*30cmのコデラート内の付着物の種の同定、個体数、湿重量の測定を行った。

東京港内の気象庁東京検潮所における最近5カ年の平均潮位は A.P.+1.134、朔望（陰暦の1日、15日のこと、大潮時の意味）平均満潮位は A.P.+2.041 m、朔望平均干潮位は A.P.+0.049m である。

ウ 水質（上層：表層水、下層：海底から1m上の層）

上層：透明度、水色、水温、塩分、pH、DO、COD

下層：水温、塩分、pH、DO、

2 調査結果

(1) 鉛直分布

調査結果を、表2 - - 1、図2 - - 2に示す。

鉛直分布を被土でみると、潮位に応じて優占種が変わる帯状の分布を示している。潮間帯の最も高い位置にイワフジツボが多く、ついで、マガキ、コウロエンカワヒバリガイ、ムラサキイガイが順に分布し、海底近くにはイソギンチャク目、ホヤ類が多い。10年度と比較するとムラサキイガイが減少し、アメリカフジツボが増加している。

(2) 付着量

11年度の付着両調査の出現種リストを表2 - - 2に、61年度からの出現種リストを表2 - に示す。今回の調査で採取された付着動物は7門51種で、10年度と比較すると全体の種類数はやや増加した。

ア 優占種

個体数による優占種をみると、中央防波堤外側の潮間帯ではコウロエンカワヒバリガイ、ホトトギスガイが多く、それらの間に甲殻類のフジツボ類などが生息している。潮下帯ではヨーロッパフジツボ、ミドリイガイ、ムラサキイガイなどが多い。13号地船着場の潮間帯はコウロエンカワヒバリガイ、ホトトギスガイが多く、潮下帯はアメリカフジツボが多く採集された。

例年みられていた、コノハエビ、ワレカラ科、カタユレイボヤなどが昨年同様採集されなかった。

イ 分類群別編組比率

分類群別編組比率の個体数、種類数、湿重量を表 2 - - 4 に示す。個体数、湿重量は潮間帯が多いが、種類数は潮下帯が多い。それぞれの個体数でみた分類群の割合は潮間帯では軟体動物類、潮下帯では甲殻類の割合が高くなっている。湿重量では軟体動物類が高い割合を占めている。

ウ 帰化動物の割合

東京都内湾で採集される付着動物は、ムラサキイガイなどをはじめ、もともとは外国産である帰化動物が多くみられる。コウロエンカワヒバリガイ、ムラサキイガイ、ミドリイガイ、アメリカフジツボ、ヨーロッパフジツボなどの帰化動物は、領地点の全層で個体数で 50%以上を占めている。

3 生物学的水質判定

付着動物調査と同時に行った水質分析結果を表 2 - - 4 に示す。13号地船着場は囲まれた水域であるために、中央防波堤外側と比較すると、CODが高く、塩分が低い。一般に、水質がわるいと多毛類の割合が増加し、水質が良くなると甲殻類の割合が増加すると言われている。分類群別個体数をみると、中央防波堤外側潮間帯の甲殻類がおおく、領地点とも潮下帯の多毛類の個体数が多い。それぞれの地点とも、水質の傾向を表してると考えられる。